

ハプスブルク家異聞（その三）

青竜の一門

—王家創立の頃—



ドイツ国王ルドルフ I 世

幅
健
志

かすかな月明りの下を黒い塊となって疾駆してきた騎馬武者らの一隊が、ルドルフ・フォン・ハプスブルク伯の陣屋にはいったのは、西暦一二七三年一〇月の初旬、それも深更のことだったと史書のひとつは伝えている。折しも伯はバーゼルの町を包囲中、郊外の高台に本陣をかまえ、市壁と大河を盾にしぶとく抵抗する敵勢と向いあっていた。

夜の帷が昼間の騒音を包みこみ、両軍のかがり火だけが、あかあかと燃えさかっていた夜半、遙か遠くの方から、馬蹄のとどろきが聞えてくる。時ならぬ物音に、ルドルフ伯の陣中は騒然となり、昼間の戦闘の疲れで泥のように眠りこけていた者も、すわ何事の出来とばかりに跳び起きた。全軍が固唾を飲んで待ちうけるうちに、やがて前方の小高い岡の端が盛りあがり、ついに人馬の影が現われる。その数三、四〇騎はあろうか。黒い集団は月光を浴びながら、しばしそこにじっと留ったまま、あたりを窺っている風に見えたが、それから隊列を整え、

ゆっくりとルドルフの陣さして近ずいてきた。

突如、先頭を進んでいた集団のなかから、一騎が蹄鉄の音を激しく散らして躍りでたかと思うや、ニュルンベルク城伯の到来を呼ばわる声があたりに響きわたる。燃えはせるかがり火は、騎士たちの甲冑と剣をあかく染めあげ、衛兵が突きだした松明の光は、夜風を受けてゆつたりとひるがえる黒鷲の紋章を捉えていた。

ドイツ選帝侯さし向けの特使・ニュルンベルク城伯を迎えたルドルフは、相手の用向きにひどく驚き、最初、「お戯れ召さるな」と本気にしなかつたとも云われる。城伯は選帝侯たちの名代として、ルドルフにドイツ国王就任の要請をしたのだった。長身瘦軀、大きく盛りあがったい、かつい、鼻梁をみせる武将、ルドルフ・フォン・ハプスブルクは、このとき五五歳、すでに初老の域に踏みこんではいたが、肉体はまだまだ衰えを知らず、とりわけ精神的にはもっとも円熟した時節を迎えようとしていた。

ルドルフは早速、バーゼル司教と町にニュルンベルク城伯を送りこみ、和睦交渉にあたらせる。敵の大将が金的を射とめたとの報に司教は動転し、「主よ、しかと座し給え。さなくばルドルフめが主の御座所をも奪いまいようぞ」と叫んではみたものの、未来の皇帝が相手では如何せん、幸い祝賀気分の敵側は、なんの要求も突きつけてこなかったから、そそくさと開城に応じる。市長を討ち取られ、長い籠城にくたびれはてていたバーゼル市民も、突如雲上びとの世界に舞いあがってしまった男を歓呼して迎え入れた。それからルドルフは王冠を戴くため、妃をともない、家の子郎党に守られながら、カール大帝以来の戴冠の町・アーヘンさして、駒を進めていったのだった。

その昔、一族の野心と信念に慫慂され、枝葉を繁らせたハプスブルク系譜学は、カロリング、ローマ、ギリシヤへとルーツを追いつづけ、一門の系図は神話の世界までも接続する勢いだったが、むろん今日ではせいぜい一

〇世紀初頭と、かなりつつましい内容に変わっている。ルドルフの登極をみるまでのハプスブルク家は、帝冠をめぐり興亡を繰り返してきたドイツ選帝侯たちの家柄に較べれば、確かに見劣りがしたものの、さりとてまったく取るに足らぬ田舎郷士のそれといったものではない。先祖のひとりと思しき人物が記録に登場する一〇世紀の初めが、いわばこの一族の揺籃期。やがて一一世紀の中葉、現在のスイスはアールガウ州、ロイスとアールの合流地点の要衝に、ひとつの砦がそそりたつ。ハプスブルクの語源ともされる「鷹ハイベリスの城ブルク」である。

ここを拠点に一門はブライスガウ、チューリヒガウ、エルザスなどのボーデン・チューリヒ・ルツェルン三湖岸地方やドイツ・上ライン一帯に勢力を扶植してゆく。とりわけルドルフの代には、シュタウフェン王家に娘を差しだしたこともあるスイスキっての名門・キーブルク家の断絶に、母方の血脈を振りかざして遺産を要求し、この地方随一の勢威を誇るまでになっていた。十字軍遠

征の途上で果てた父親の跡目を継いだのが、かれ二一歳のとき。やがて父方母方双方の叔父と家領の分割をめぐる衝突したが、これをうまく切りぬけ、伝来の所領を守りぬいたばかりか、母親の里のそれをも付けくわえてしまったのである。

血の気も多く遣手の伯に、恐れをなした近隣の領主らが、相かたらって対ルドルフ戦線を組んだことがあった。事の起りは復活祭の馬鹿騒ぎの渦中、バーゼル市民とルドルフ輩下の騎士がいさかい、多勢に無勢だったのだろう、殺しの玄人の方が命を落してしまうという、當時としてはごく有りふれた殺傷事件。しかし御多分に漏れず、隣接の司教領とは常日頃大いに反目する仲だったから、双方とも、これまた中世特有の、実に短絡的な行動定式を地でゆき、情況はたちどころに全面衝突の様相を呈してしまう。そのうえ伯の勢力拡大を苦々しく思っていた者らも、名利ザンクト・ガレン修道院をかつぎだし、ルドルフの周囲はことごとく敵というまざい状態に

なった。このときルドルフは孤立無援の窮地を脱すべく、単騎ザンクト・ガレンの敵地へ乗りこんでいったという。修道院長が一味郎党を狩り集め、ルドルフ打倒の策を練っていた宴席に、丸腰で現れたかれは堂々とこれまでのいきさつを釈明しながら、非はバーゼル側にありとブチまくり、形勢を逆転させてしまった。たぶん相も変わらず土地にしがみついていた貧乏領主らの、都市に對する敵愾心を巧みに煽りたてたものだろう。事の成りに行きに仰天したバーゼル司教と市民は、多額の金子をついで講和を願う羽目になったのだった。

ニュルンベルク城伯が一二七三年の秋、ルドルフの前に現われたときも、またまたバーゼルとの抗争がもちあがっていたのである。もっともこの司教領、ハプスブルク家所領地のド真中に居すわり、エルザスとスイスの家領を断ちきるかたちになっていたから、目障りこのうえもない存在ではあった。



国王選出の吉報が、ものものしい布陣の最中にもたらされるという一幕にも窺われるように、当時ドイツは大空位時代と称される戦国乱世の御世である。シュタウフェン朝最後の光芒をへなつた皇帝フリードリヒ二世の崩御のあと、二重選挙と傀儡王の出現に、帝国の手綱を引きしめる者はなくなり、諸侯はそれぞれに血道をあげて、自家の勢力拡大に努めてきた。帝国領は蚕食されて世襲地と化し、利権争いはすぐさま武力衝突のかたちをとり、しかもこれを仲裁できる者はいない。史家は一樣に中世古代の帝国から、領邦国家へと推移する歴史の必然を説きながらも、帝国紊乱の元兇として、一見絢爛たる帝政を実現したかに見えるフリードリヒ二世を槍玉に挙げるようだ。

このフリードリヒ二世という皇帝ほど、毀誉褒貶のわかれる人物もめずらしい。ビザンツ風の文物を愛でなが

ら、パレルモの豪華な宮殿に住み、中央統制のいき届いた政治機構を作りあげ、しかもルネッサンスの萌芽すらぞかせる華麗な文化を開花させた統治者として、カール、オットーなどと同じ「大帝」の尊号をもって呼ばれる一方で、残虐にして不敬の大悪党、由緒ある神聖ローマ帝国を、ガタガタにしてしまった無責任な男とも評される。とりわけ、教会関係者と民族史観を奉じるドイツの学者にはウケが悪い。教皇による破門にも大して動ぜず、剣のかわりに外交で聖地回復をやりとげ、保護料はたっぷりとったがユダヤ人に寛容という、当時の感覚ではとても理解できない気宇を備えていたうえ、父方からはとしたドイツ人の血を受けついでいたものの、南国はシチリアに成長し、ドイツ語もほとんど話せず、アルプス以北の「蛮地」に顔を出すのもまれで、いわば異国の君主ともいふべき存在だったから、教会やドイツ人史家が、このフリードリヒを誹謗ないし軽視したのもうなずけようか。だがこのフリードリヒ、当時の聖職者や騎

士の狭い見では、とらえきれないスケールの人物だったことも確かなようだ。

かれは祖父にかのフリードリヒ赤髭帝を持ち、父親はドイツ国王にしてシチリア王のハインリヒ六世帝という、シュタウフェン王家の嫡流をくむ。「帝国の庭」・ロンバルディアを支配下に置こうと奮戦したのが祖父であったし、ノルマン王族の妃から得たシチリア王国の継承権を主張して、半島に乗りこんでいったのが父親だった。シュタウフェン朝の半島征覇の夢は、教皇庁やイタリア諸都市を刺激し、この地に絶えず紛争の種を播き散らす。父親のハインリヒは反抗する貴族らを焼き殺し、僭称王親子の遺骸をも墓から引きずり出したうえ首を刎ねるなど、猛烈な弾圧と殺戮のはてに、半島南部を平定したが、その報いを受けたものか、熱病にかかりあっけなく物故してしまふ。ドイツでは苦汁を飲まされつづけてきたヴェルフエン一族が、またしても決起し、教皇、英仏両国の介入に王冠は、大帝の叔父・フィリップ・フ

オン・シュヴァーベンと獅子公の子・オットーの間を揺れ動く。

反シュタウフェン党にとって当面の敵は、甥の擁立を企てながらも、結局みずから王座に座りこんでしまったシュヴァーベン公だったが、教皇と皇后の後見下に置かれ、幼な子とはいえずでにシチリアの王冠を戴いていたフリードリヒも、大いなる恐威の対象だった。かれらは遙か南のかたにいる母子をいいことに、悪質な中傷を流し、女ざかりの末亡人は、とうに女の泉も涸れはてた六〇歳の老婆、フリードリヒは何処からかさらってきた卑賤の子供だとされてしまふ。もったいなくも教皇猊下の保証はあり、風習どうり産褥の現場に立会い、産声をあげる赤子の股間に鎮座した可愛らしい男性シンボルをしかと見届けた者も多かったのに、この種の噂がドイツには根強く残ったようである。敵側の攪乱の戦術、いやいやこれは甥の存在に、ヴェルフエン派にも優る恐怖を感じていた叔父国王そのひとの仕業だとする説も強い。と

まれ、この頃女三〇歳といえ、そろそろお褥辞退の年令、あまつさえ、フリードリヒが初産だったことを想えば、実に効果的な反キャンペーンだったときれよう。

フリードリヒは聖座の後ろ盾とその毛並みの良さとで三歳にしてシチリア王、一七歳でドイツ国王、二六歳のときにはやくも皇帝という華々しい栄達ぶりだったが、やがてシチリアから半島全域の経営に乗りだすに至って、教皇庁と衝突というお決まりのコース。ナイル河口・ダミエッタでの敗北に失地回復をあせり、しかも手におえなくなった青年皇帝の関心をイタリアからそらすには、パレスチナ送りが一石二鳥の方策だったから、聖座は再三にわたり十字軍編成を催促する。国王就任の際にとりつけた従軍の誓約をたてに、破門の脅しで迫る教皇にむかい、フリードリヒはなにやかやの口実をもうけ、一向に腰をあげようとしな。内政問題をかかえこんでいた事情もあるが、大帝の冷静な眼は、聖戦の理想と現実をしかと見据えていたのだと考えられなくもない。一

度なんぞは艦隊が勢ぞろいし、あとは錨と帆を巻きあげればいいまでに、準備万端整っていたのだが、身体の具合がおかしいというわけで、聖地ならぬ湯治場に出掛けてしまう始末。将兵の間にひろがっていた伝染病にかかったらしい。教皇は烈火の如く怒り狂い、これを仮病と断じ、ついに誓約違反の罪名でかれを糾弾する。ところが皇帝は破門中という不浄の身でありながら、その年のうちにプリンディシの港を堂々の出航。もっとも大帝にとっては聖都解放より、エルサレム王女との結婚で得た王国の継承権の方が気にかかっていたのだ。かれは敵と一戦も交えず、外交交渉でエルサレムとほか二都市を取りもどし、イスラム教徒との共存という実に現代的な解決策を示す。こうした快挙にもかかわらず、この十字軍は非合法の私的な遠征軍、そのうえ事もあるうに、邪教の輩と契約を結んだのだったから、教会側の苛立ちはずます募ってしまう。

ふたつの巨大な権威の確執に、お膝元のイタリアはま

つぶたつに割れ、組みつほぐれつの抗争に明けくれる。さして興味も魅力もない蛮地だとはいえ、支援欲しさに皇帝はときおり北上し、ドイツ各地で宮廷会議を召集、これみよがしに王者たる者の綺羅をつくして、ひとびとをうならせる。いや、それだけならまだしも、諸侯の懐柔と慰撫のため、無闇やたらと手土産を置いて歩く。従来王権の下にあった裁判・関税・鑄造権などは聖俗諸侯に下賜され、都市にも特権がバラまかれる。時代は一二一五年の英国のマグナ・カルタ、一二二五年のハンガリー一の金印勅書といった具合に、王権に制限を加え始めていたが、それにしても大帝がイタリア制覇のため、アルプス以北の帝国領をないがしろにしたことは否めない事実のようだ。

※ ※ ※

ドイツ諸侯のうちでも、このフリードリヒ大帝と深く

関ったのは、オーストリアとシュタイエルマルクの両公領を封じられていたバーベンベルク家で、これは同家の断絶をひかえた二代の当主の治世にあたる。一門は代々シュタウフェン王家の藩屏をもって任じ、バルバロッサ、ハインリヒ六世、フリードリヒ二世の恩顧を受けながら、東方の地に着々と地盤を固めてきた。この間、オーストリアは辺境伯領から公領へと昇格し、シュタイエルマルクをも配下におさめ、レオポルト栄光公の時代には公女のひとりをも、大帝の長男でドイツ国王・ハインリヒ七世の妃に送りこむなど、オーストリア公は並み居る群臣のなかで、ひととき目立つ存在となっていた。

ところがレオポルド公の息子、その名も大帝と同じフリードリヒ二世の代になると、帝国との関係はすこぶるギクシャクしたものに変わってしまう。フリードリヒは闘争公と称されるだけあって、気性が激しかったうえに、外交的センスは極度に乏しく、家の威信をかさに、皇帝などさして問題にもしない。姉宮の持参金も言を左

右にして払わず、ドイツ政策をめぐる対立から廢位された義兄の処遇に苦情を申したて、再三にのぼる参朝命令にもなかなか応じない。しびれを切らした皇帝の方が、わざわざオーストリアの地まで出向く有様だった。かの「小特許状」はバーベンベルク家に、領国以外への参内義務を免除していたからである。

対ハンガリー戦の軍資金欲しさに、領国全域に重税を課し、抵抗を見るや教会・修道院まで押し入り、金品を強奪するという公の暴挙に、大帝は追放令を発し、両公領召し上げの沙汰を下す。雪崩をうって進撃してくる帝國軍と配下の豪族らの反乱に、鬪争公は居城地・ヴィーンを捨て、堅固な城壁を誇るヴィーナー・ノイシュタットの町に逃げこみ、籠城の構えで抵抗しようとする。

この年の冬、大帝は窮地に追いこまれていた鬪争公を尻目に、威風堂々のヴィーン入城をやりとげた。変わり身の早い町は、敗色も濃い領主を見限り、さっそく強者に靡いたから、皇帝の方は殊勝な心ばえとばかり、帝國

都市の勅許を下賜。ボヘミア王やアクウェリア主教、マインツ・トリール・ザルツブルク各大司教とバンベルク・パッサウ・レーゲンスブルクの三司教、それにバイエルンとケルンテン公、チューリンゲン伯など、多くの聖俗諸侯が勢ぞろいしたヴィーンでの宮廷会議は、赤髭帝の御世に優るとも劣らぬ絢爛たる光景を呈したという。

大帝はこの会議で、廢王ハインリヒにかわり、次子のコンラートをドイツ国王に指名させ、不気味に鳴りをひそめたままの鬪争公をそのままに、ドナウからライン川方面へと巡幸の道をたどった。ところが皇帝の姿が消えるや、鬪争公は突如ヴィーナー・ノイシュタットの城壁から躍りでて、またたく間に帝國残留軍を蹴ちらしてしまふ。その勇猛ぶりに恐れをなした領国の貴族や都市は、ふたたび公のもとにひれ伏し、ヴィーンに振りだされた大帝の認可状は、とりあえず空手形に終わる格好となるが、勅許拝領の榮譽は町の大いなる実績として残ったのだった。

闘争公との一件にも露呈されている如く、大帝のお出ましになるところ、不思議なことにならず一度は、王者たる者の輝きに充される。戦っては負けを知らず、破門の身をもって聖墳墓を解放し、ダビデの後継者として「エルサレム王」の称号を帯び、巡幸にあっては伺候する者の列ひきも切らずといった調子で、まさしく帝王の栄光もここに極れりの感がある。だが、かれが大見得をきりながら通りすぎていったあとは、輝かしき事績もあつという間に霧散し、以前にも増して混沌とした世界が広がるばかり、ことごとくはこれ槿花一朝の夢といった風情に終ってしまう。

しかしながら同時代の者たち、とりわけ綺羅をつくしでの巡行や宮廷会議、はたまた大盤ぶるまいの饗応の場を垣間見た者らの眼には、大帝の姿こそ不死の象徴、永遠の生を生きる神々のひとりだと映ったらしい。大帝によせる賛仰の念は、やがて同名の赤髭帝の追憶と混ざりあい、森の奥深くに眼る白髭の皇帝というイメージを生

みだし、あの帝国復興の神話となって定着してゆく。

はやくもルドルフ・フォン・ハプスブルクの国王時代、「我こそはフリードリヒ二世なり」と人心を惑わす大騙り者が現われ、ヘッセンあたりを中心に多数の信奉者を見いだし、一大勢力へと結集する勢いを示した。寛大と正義のひとで鳴らしたルドルフだったが、この手の騒動の侮りがたさを知悉していたのであろうか、男を捕らまえるや、満足な裁判もせず、即刻火あぶりにしてしまう。この詐欺師、かつて大帝の側近だったというから、さだめし故人の真似は堂にいていたのだろうが、それにしても、時代がひとびとに与えたフリードリヒの幻惑は大きかったようだ。いや大帝自身、みずからの演出に酔いしれ、栄光の帝国が虫くいだらけだったとは、今際のきわまで気づかなかつたのかもしれない。

強力な統治機構と美事な文化を誇ったシチリア王国も、大帝の崩御とともに瓦解してゆく。シュタウフェン王家末裔の最期は悲惨このうえもない。大帝の長子は父

親により廢位・幽閉された挙句、塔上から謎の墜落死、次子コンラートは病により早逝、もうひとりの皇子マンフレートは、教皇の差しだすシチリア王冠の餌にくらいついたアンジュー家のシャルルとの合戦で討死。イタリア人ともドイツ人ともいわれる皇婿のエンツィオは、敵側の獄舎に呻吟すること二三年、孫のコンラディンは再度アンジュー家に決戦を挑んだすえ、捕われて罪人の如く斧の下で落命。これをもって百有余年にわたり、ドイツに君臨してきた王家のひとつが断絶したのだった。

皇帝権全盛の時代はとうに過ぎさっていた。ヨーロッパ各地には領邦国家と都市勢力が割拠し、アルプスの南と北とにまたがるような帝国理念は、壮大なアナクロニズム以外の何ものでもなかったのだ。大帝なきあと二〇年余りにわたって、帝国の混乱は続く。有力諸侯は適当に傀儡の王を選出しあい、擁立と廢位の応酬に明けくれる。国王の座にすわらされた者らは、それぞれに所領や特権の安堵状を乱発し、ひとつの物件に三種ものお墨付

きが付きまとうのもザラで、三者三様に権利書を振りまわして譲らない。戦火はやまず、治安は乱れ、城砦は雨後の筍よろしく林立する。土豪や騎士は意気盛んな町衆を眼の仇にし、街道や河川をみはらかす砦から、商隊や旅人をうかがい、略奪行為にはしり、関所を設けては通交税をふっかける。盗賊騎士は至る所に出没、ひとびとは金品を奪われ、身代金を要求され、あげくの果てには命をも失なってしまう。交易を生業とする都市の被害は甚大だったが、教会関係者らも大きな痛手を蒙った。かつて奇特な者たちに寄進され、豊かな耕地となっていた寺社領も、荒々しい子孫らに奪いかえされ、祭器ですら安全とはいえない。ちなみにルドルフ国王が破壊した盗賊騎士の砦は、チューリンゲン地方だけでも六六を数えたという。

ドイツ帝国が大空位時代に突入したのと、ほとんど時を同じくして、オーストリアもまた、主なき混乱の時代を迎えていた。西暦一二四六年、闘争公が世継ぎに恵ま

れないまま、身罷ったのである。このバーベンベルク家断絶の空白に乗り、オーストリアとシュタイエルマルク両公領に手を延ばしてきたのは、ボヘミヤ王オトカル二世だった。

※ ※ ※

鬭争公の死とオトカル王がバーベンベルク家領に覇権を確立するまでには、ちょっととした幕間劇がある。鬭争公がハンガリー勢を深追いした挙句、勝ち戦にもかかわらず、徒らに命を棄ててしまったとき、いまだ存命中だったフリードリヒ大帝は、公領をいわば封土契約消滅のかたちで、さっさと帝国返還の処分に付す。このとき大帝は祖父赤髭帝が、オーストリア公・ヤゾミールゴットに与えた「小特許状」を考慮しなかったけれども、これは先の事件への報復というより、むしろ帝国法に準拠した当然の処理とみなす向きが多いようだ。確かにバルバ

ロッサはバーベンベルク一門に、女子相続を認めるといふ破格の特典を授与していた。しかしこれは当時まだ息子に恵まれていなかったオーストリア公夫妻一代に適用されると理解するのが妥当、たとえ拡大解釈するにしても、宗主に男児なき場合の条項と見るのが穩当というわけである。

当事者たちにあつては、要は具体的な信義関係、いふなれば文書など儀式上の小道具、したがって文言の厳密さなど問題のラチガイだったろうが、世智辛い後代は公夫妻に向けられた、「かれらに続く子供たち、男女の別なく、帝国よりオーストリア公領相続の権利を得、これを保持せん」という玉虫色の一項にとびつく。同じ勅許状のなかに、参内・従軍義務の大巾な軽減を明記してくれた皇帝と、その条項を一度として用いることのなかったオーストリア公の関係からすれば、厳密な規定語など必要としない双方の了解事項も、遺産をねらって眼を血走らす者たちには通用しない。帝国封土に女子相続の

前例はなく、領国安定の為とはいえ、きばりすぎたかもしれぬという思いは、バルバロッサの胸中を去来したろうが、さりとて後の世が傍系まで持ちだし、継承権の争奪戦を演じようなどは、予想だにできなかったに相違ない。

フリードリヒ大帝は二公領を帝国直轄としたものの、派遣した代官に地元が反発し、宗主権をめぐりボヘミヤとハンガリー、それに教皇庁がそれぞれ独自の候補を押したてて介入してきたからややこしい。闘争公の姉宮で故ハインリヒ魔王の妃だったマルガレーテ、妹宮のマイセン伯夫人とその息子、さらに闘争公の亡くなった兄の娘、つまり姪御にあたるメーレン伯未亡人のゲルトルトである。ゲルトルトはバーベンベルク家断絶に向けて布石をめぐらそうとする大帝にも、目を付けられたことがある公女で、夫メーレン伯が亡くなったあと、再婚をかさねながら、



ボヘミヤ王オトカル二世

バーデン伯、ハンガリーにと継承権を持ちまわる。大帝はどうも子無しの原因を、闘争公その人にありと読んでいたらしい。ボヘミヤ王父子が狙ったのはマルガレーテ、一方オーストリアの土着勢力は、マイセン伯の息子をもらいいうけようと使節団を出発させた。ところがこの一行いい加減なもので、ボヘミヤの地を行く途中、オトカル（在位一二三〇——五三）の父親ヴァーツラフ一世に差し止めをくらい、ふんだんの贈物と強迫責めに、マイセン行きの役目を忘れはてたらしく、王の息子オトカルを有難く頂戴して引き返してくる始末。もっともボヘ

ミヤ王に云わすれば、贈与は儀礼の範囲内、況や強要など滅相もない、隣国の安定を思えばこそ、力添えを約束したのだということにでもなるうか。

かくして王子オトカルは親ボヘミヤ貴族らの要請を受ける恰好で、隣国に乗りこみ、二公領の支配者におさまるが、武器を振りかざしての制圧だけでは万全とはいえない。ボヘミヤ王は合法的な継承をもくろみ、息子に公女マルガレーテを求めようとした。彼女は夫の死後尼僧院入りしていて、しかも四七歳という高齢。しかし野心満々のボヘミヤ王子には二五歳もの年の開きも問題ではない。一二五一年、ハンガリーとの国境の町ハインブルクで、元ドイツ王妃にしてバーベンベルク家公女は、小特許状と二公領を持参金に、年に似合わせぬ花嫁役を演じたのである。

ボヘミヤ王家にとっては競争相手を出しぬき、継承権争奪戦で優位にたつのが先決事項、他の事などあとからどうにでもなると踏んでいた。正直なところ、五十路に

手が届きそうな老公女に、世継ぎ誕生の期待はかけようもなかったろう。花嫁の弟君・鬪争公も自分の欠陥は不問に伏し、「子無きは去れ」とばかりに、幾度となく妃を取り替えている御時勢、監督官庁の教会ですら、いつでも神の思召しにかなう離縁の口実を捜しだしてくれる。事実、一〇数年の後、世継ぎ欲しさに、ハンガリーの王族の娘を所望するオトカルに対し、聖庁が捻りだしてくれた弁明のひとつは、兩人の血が濃すぎるといふ、まったく語るに落ちたものだった。四代までさかのぼっての血縁を云々したひには、王族らはひとりとして適法の配偶者を持たないことにもなるう。ともかく、ここにバーベンベルク家の公女は御用済みという現実的な処理が施されたのだった。

時代は下って、一八二五年二月一九日、ヴィーンはブルク劇場に、グリルパルツァーの『オトカル王の栄華と没落』がかかった。幕がおりたとき、大きな拍手が湧きあがったものの、観客たちの顔には一様に、困惑しきつ

た表情が浮かんでいた。やがてこの異様な空気は、ヴィーン在住のチェック人の抗議の声となって、そのかたちを現わす。そもそもこの作品、一年余りも検閲当局の手に保管されっぱなしだったところを、詩人に近作があると伝え聞いた皇后の働きかけで、ようやく陽の目を見るところという経過をへており、この間の事情はフランス帝政下の厳しい検閲制度を物語つてもいる。当局の見方からすればグリルパルツァーの戯曲、それなりに大きな問題ををかかえこんでいた。さりとて、高名な詩人の作品だけに、即発禁処分とするわけにもゆかず、棚ざらしのまま放置していたというのが事の真相だろうか。

検閲官の逡巡にも無理からぬところがある。実は詩人にしてからが、史書で知った霸王オトカル二世の姿に、当時まだ記憶にも生々しかったナポレオンのそれがかさなり、戯曲の構想を膨れあがらせて来たのだったし、ことにフランス皇帝が妃ジョゼフィヌを離縁し、ハプスブルクの大公女を迎えた顛末は、まさしくボヘミヤ王の

所業そのものと映っていたのだった。始祖ルドルフを仁徳に溢れ、信仰も篤き国王と讃えながら、王朝の創業と一門の繁栄を寿ぐ、天覧興業おあつらえの祝典劇、しかしボヘミヤ王の末路はおのずからナポレオンとの連想を呼びおこすだろうとの危惧が、当局にあつたろうと思われる。係官は、ボナパルト家とのいきさつを出来るなら無かったことに、それが不可能ならせめて「お倉入り」をと願っているヴィーン宮廷の意向に、留意せざるを得ない。大公女とコルシカ男との一件は、公式の場で口にはぼせてはならぬヴィーン宮殿の禁忌だった。

当局の配慮はもうひとつの面にも注がれている。グリルパルツァーとしては史書にあたり、伝承を踏まえ、しかもオトカルの覇業もそれ相応に評価しているとの自負があったが、検閲官はそうは受けとらない。作品は霸王オトカルを正面に持ちだしているものの、その実、神の加護と祝福のもとに創始されたハプスブルク王朝の、大いなる讃歌だった。霸王の没落は歴史的事実だとして

も、その扱いは慎重でなければいけない、チェコ民族主義を無用に刺激することは避けるべきだとの見解である。フランス帝のお声がかかりで上演まで漕ぎつけたものの、案の定、民族の英雄が残虐にして驕慢のそしりを受けるのは許せないとの騒ぎが持ちあがる。チェコ民族主義はオトカル王の「栄華と没落」を、ただお芝居としては片づけられない、民族の誇りにかかわるものと受けとめたのだった。「オーストリアの悲劇はこの地上で最もうぬぼれの高い民族、ボヘミヤとハンガリーを含んでいることだ」というグリルパルツァーの苦渋にみちた言葉は、やがてハプスブルク王朝解体の予言ともなるが、ちなみにこの『オトカル王の栄華と没落』、第二次大戦で被害を受けたブルク劇場が一九五五年再建されたとき、こけら落しの祝典劇となった事実にも、オーストリア人のこの作品によせる評価の程が知られよう。

※

※

※

西暦一二七三年一〇月二四日、ルドルフ・フォン・ハプスブルクはカール大帝の衣鉢をついだ。選帝侯らはひとりの新人を、国王の座に祭りあげてみたものの、大した期待はかけていない。帝国の威信などどうでもよく、奪い取っていた領地や特権を、新国王に認知させればそれで充分だった。臣従の誓いも封建の儀式も、現状安堵のお墨付きを交付させるまでの粉飾、せいぜい事は賑々しく取り行った方が、領国に控える有象無象の郷士らを平服させるのに効果もあるうというもの。

国王選挙の呼びかけは教皇の方から為されている。強力な王権の成立を阻止し、ドイツ国内を分裂させて置くのが聖庁外交だったが、教会領は荒され、管理権をめぐる係争も絶えない。ひとりの王を立てるにしくはなしと踏んだ聖庁は、選帝侯らに働きかけ、もし国王選出がすみやかに実現しないようなら、教皇じきじき乗りだす所存との牽制も忘れなかった。人選は慎重になされる。指

導力の欠けた人物では、混乱に輪をかけてしまうだろうし、さりとて強大すぎるのも、ますますもって具合が悪い。

姿を現わさぬボヘミヤの代りにバイエルンを据え、七という聖なる定足数をみた選帝侯会議は、ルドルフ・フォン・ハプスブルク伯を、まずは無難な駒としてつまみあげた。ボヘミヤ、メーレン、オーストリア、シュタイエルマルクだけでなく、ケルンテン、クラインにも手を延ばしていたオトカル二世は、その余りの勢威ゆえに選帝侯らに忌避され、聖座の方も、国王選出の場にボヘミヤ代表がいなかったとの王の異議申し立てを却下する。聖庁にとってオトカルは、蛮族の跳梁に難渋するドイツ騎士団を支援し、異教徒プロイセン討伐軍の音頭すらとった功臣だった。しかしつい目の先のアドリア海東岸にまで迫った霸王の勢いに、恐れをなしたのである。

使者ニュルンベルク城伯の口上では、「英知と徳行」ゆえ衆議一致しての推戴という仰々しさだったが、選帝

諸侯の姑息な思惑こそ、ルドルフ国王誕生の背景だったことも、また明々白々の事実だろう。しかし推戴者らは、霸王オトカルに「貧乏伯」とさげすまれていたこの男が、ただの田舎郷士ではないのをすぐ思い知らされたのである。

隙あらば新参者を威圧してかかろうと身構える選帝諸侯を尻目に、ルドルフ・フォン・ハプスブルクはみごと就任式を乗りきったばかりか、その後も巧みに外交戦略を展開、有力諸侯をひとりひとり籠絡してゆく。戴冠の儀式もすみ、封建の場を迎えたときのこと、偶然か故意かわからぬが、この儀式に使われる王笏が見あたらない。新国王の堂々たる立振る舞いに舌をまき、焦りにあせっていた選帝侯らはここぞとばかり、「王笏なくんば、封建の儀はのちほど改めて、とり行わらせ給え」と口々に申したてる。だがスクツと立ちあがったルドルフは、かたわらにあった磔刑像をつかみ、「おのおの方、これをば御覧なされい。これこそ我が為に、みずからの血を

流し給うたお方の標しるしなり。王笏としてこれにすぐるものあらんや。余はこれを我れと帝国に齒向かわんとする者らに用いん」と凜然と云いはなつたと伝えられる。たかが田舎侍と見くびっていた諸侯らも、これには一言もない。一同は次々と新国王の前にひざまずき、封邑拝領の礼をとり、式はつつがなく終了したのだった。余りに決まりすぎているこの場面は、むろんどこまで史実に沿ったものか知る由もない。ともかく、これはルドルフの並々ならぬ器量を伝える消息とみて大過なさそうだ。

ハプスブルク家の始祖・ルドルフにまつわる伝承も、他の王家創始者と同じく、たいそう多い。武勇談にも事欠かぬし、陣中にあつてはみずから衣の綻びを直し、兵卒と同じ飢を味わい、粗食に甘んじるなど、その質素で気さくな人となりも美談風の逸話となつて語りつがれる。

さまざまの伝承のなかでひとときわ光彩を放つのが、敬神の心も篤い有徳の人士、信仰篤き武人といったルドル

フ像であろう。信仰の篤き由をもって、神はハプスブルク家のルドルフを、聖ペテロの騎士として召命し給うたという考え方は、一門の誇りと野心を支えながら、王朝終焉のときまで強力な作用を及ぼし続ける。

封建の式典で磔刑像を握りしめるルドルフの姿が、神の加護とともにあるハプスブルク家の象徴とされた如く、ルドルフ神馬奉納の故事もまた、王朝の創業が神意にもとづいてなつたのだとする一門の信念と自負とに、わかち難く結びついている。この故事は、ルドルフの戴冠式の祝宴を歌つたシラーの物語詩「ハプスブルク伯」にも採りこまれていたもので、詩人は題材をルドルフの故郷スイスの伝承に求めたらしい。シラーの作品では、アーヘンの祝宴にひとりの白髪の伶人が忽然と現われ、王の戴冠と一族の繁栄を壽ぎながら、今日この良き日に恵まれたのも、ひとえに国王の篤き信仰の由なりとして、万座の者たちに向い、ありし日のルドルフの奇特な行いをひとくさり吟じるといった趣向になっている。そ

れによると伶人がまだ役僧だったころ、臨終の秘蹟を授けようとする司祭の供をして、谷川沿いの道を急いでいたことがあった。折悪く川は増水し、道は一向にはかどらない。そのとき丁度猟をしていたハプスブルク伯は、難渋する司祭を見てみずからの駒を与える。

主を乗せまつりたる馬なるに

その馬に乗りて敵と闘い、狩をするは

神の御意にそむく業なり

馬を返しにきた者に向い、ルドルフはこう語り、その駒を奉納、司祭はその後大司教の位まで登ったという。史家たちはルドルフ擁立にからみ、マインツ大司教が大いに動きまわった事実には派生した伝承とこれを見ているが、こうした逸話のたぐいも意識的に強調され、長い歲月のなかで伝統と化し、一種の信仰とも云うべき域に達した場合、途方もない力を帯びてしまう。始祖ルドルフ

をめぐる伝承がまさしくそれである。

※ ※ ※

ルドルフ・フォン・ハプスブルクはドイツ国王に就任するや、帝国の混乱を収束すべく、ただちに平和令を発し、錯綜する系争処理のため一二四五年、つまりかのフリードリヒ二世が教皇の廢位宣告を受けた時点までかのほり、この間に選帝侯の同意なく発布された勅令を無効とする。公正な裁きびとと称されるルドルフではあったが、現実感覚に富んだ人物のこととして、臨機応変に事を運び、とりわけ有力ドイツ諸侯の既得権にふれるような愚行は犯さなかった。しかし、このうえもなく厄介だったのは、ボヘミア王オトカル二世の処遇である。霸王は選挙無効を申したて、封建の場にも出頭せず、臣下の礼もとろうとしない。ルドルフはとりあえず旧バーベルク家領の封土を保留処分とし、霸王に参内をうなが

す。あくまでかれを篡奪者として断罪するまでの決意はなかったと思われ、もし霸王が出頭要請に応じていたなら、事態は大きく変わってしまったらうと見る者も多い。

オトカル二世にしても、バーベンベルク家の老公女を妻に迎え、大空位時代の傀儡国王リチャード・フォン・コンウォールから、新領土安堵の書面をもらい受け、それ相応の名分は揃えていた。だが、結局のところ公女は、身ぐるみ剥かれた恰好で追い出され、勅書の方も帝国法違反のそしりをまぬがれ得ない。帝国封土は主君手ずから、采地の象徴とされる槍、もしくは剣を封臣に下すといった手続きが、慣行上不可欠とされていたからだった。

ボヘミヤの地が神聖ローマ帝国に臣従したのは、西暦九六二年のこと。プシェミスル家は叙任権闘争の過程で上手に立ち廻り、時の諸皇帝から一代の王号を許された時代を経て、フリードリヒ大帝の治世下、一種の世襲王

国としての地位を確立していた。大帝はボヘミヤに帝国裁判権は及ばぬものとし、ニュルンベルク、バンベルクなどの都市以外は参内伺候の必要なしとしたが、帝国の封土権は手離なさなかつたらしい。ルドルフはこれを念頭に、ボヘミヤ本国と属州メーレンは不問に付しながら、慣例に従い三度の召喚状を發したのち、旧バーベンベルク家領を帝国に没収、霸王には追放令をもって臨んだ。

すでに二〇数年間にわたり、オーストリアとシュタイエルマルク公領に君臨していたオトカルではあったが、その余りに厳しい統治と本国ボヘミヤ優先の姿勢に、土着勢力は反発、憤懣は随所に渦まいている。とりわけ、歴代のバーベンベルク家当家から多大の特権を認められ、宗主推戴の権利すら保持していたシュタイエルマルク貴族の抵抗は強かった。この地域、バーベンベルク家伝来の御領地ではなく、新たに封土されたものだったから、歴代のオーストリア公も手控えざるを得なかった事

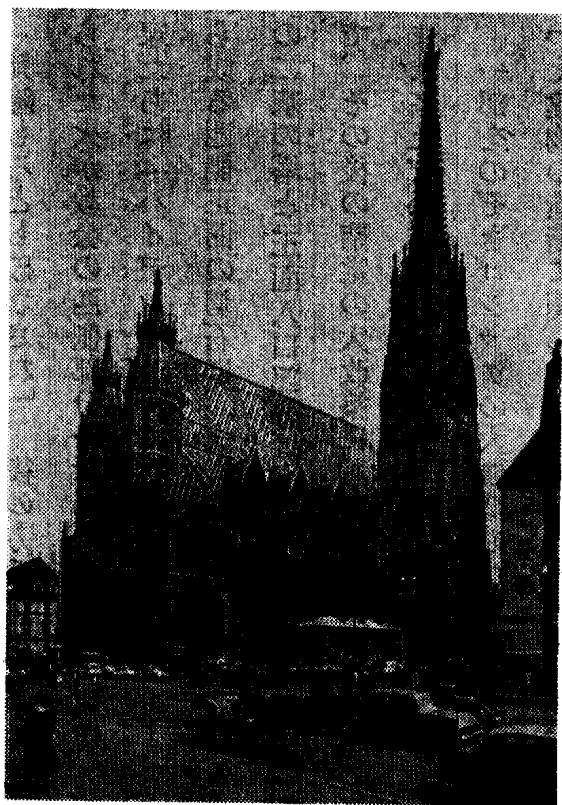
情がある。

シュタイエルマルクはブルック・アン・デア・ムールからグラーツに通じる谷間、かのファンベルクの廃城にまつわる「アグネス怨霊譚」も、霸王オトカルと結びつけられるという。アグネスなる女性は、霸王により謀反の咎で殺されたファンベルク城主の奥方。城の明け渡しを迫る王に対し、彼女は峻険な山城に一族郎党と立籠り、兵糧攻めにも屈しようとしなない。そんなある日、城山を見張る敵兵の眼に、野苺を捜す童子の姿が映った。そっと後をつける兵の前方で、突然子供の姿が岩間に消えてしまう。城に通じる抜け穴だった。包囲網をときはじめた眼下の敵に、城内はわかかえり、その晩祝宴が催された。宴たけなわの頃、オトカルの軍勢はひそかに、抜け穴から城に侵入。奥方はわずかの近従に守られ、天守櫓に逃げこんだが、いまやこれまでと盾と剣を手に、夜叉の如く躍りでて壮絶な最後をとげる。こののち惨劇のあった六月の満月の晩には、馬のいななきとともに、

金髪を振り乱し、大振りの剣を握りしめた白衣の女が、一団の荒武者を従え、崩れはてた城山に現われるようになったと語り伝えられる。

アグネス伝説を生んだ背景には、霸王オトカルがおびただしい数の城を潰し、反抗する者は容赦なく断崖したという史実が控えている。霸王の暴虐ぶりはすさまじかったようで、史書には多数の貴族を馬の尾にくくりつけて引きずりまわし、牢にぶち込み、餓死させ、縛り首・火刑に処したとある。シュタイエルマルク、オーストリア公領では、伝来の不羈の気風に怨念がからみつき、ボヘミヤの「軛」^{くびき}から脱しようと、機を窺う貴族も多く、ルドルフの号令一下、かれらが決起するのはまず間違いなかった。

一国一城の主を気取らねばおさまらぬ豪族らに、霸王は強圧的にでざるを得なかった。しかしプロイセン遠征の際、ケーニヒスブルクを建設した王のことだけあって、新興の都市勢力には大きな理解を示す。二度にわた



シュテファン大聖堂

る大火で大きな被害を出したヴィーンに、ボヘミヤ王はさっそく森を提供し、税の軽減をはかるなど対応も早い。バーベンベルク家はレオポルト栄光公の代に造営が始まったとされてきたヴィーン宮殿最古の建造物・スイス宮も、今では霸王が対ルドルフ戦に備えて築城したとの説が有力、シュテファン大聖堂建立にも王の援助がする大きかったとみられている。

大聖堂に関する最も古い記録は、奇しくもヴィーンが

初めて「都市^{キレタス}」と記された一一三七年の文書。バーベンベルク家七代目当主・レオポルト寛大公が、聖ペーター教会をパッサウ司教に献じ、司教からさるブドウ山とヴィーン市街地に隣接する寺領を貰い受けたという記録だが、ここに他の教会を「ヴィーン聖堂」の管轄下に置くとの内容が盛りこまれており、さらに一〇年後には「ヴィーン聖堂」の献堂祭が、パッサウ司教の手で為されたとの文面がふたたび現われる。両文書とも「ザンクト・シュテファン」といった呼称を用いてはいないものの、パッサウの守護聖人がこの聖者であるところから、これが現在の教団の前身だったことは、まず間違いなさそうだ。ただ「ヴィーン聖堂」の建物が、今の場所に建てたかどうかは定かでなく、「聖堂」も木造だったのではと慎重を期す説もなくはない。

現在の地に建物が確認されるのは、先のふたつの文書から百年以上もとんだ一二五八年と一二七六年。ともに町の大火に関連して触れられ、初めの方では、教会は

「梵鐘もろとも破壊され」、後の方では、東南の風に煽られた火が教会の西側部分を舐めたとある。事実、専門家たちは「ハイデントゥルム」と「リーゼントーア」から成る西側正面の切石に、火災の痕跡を認めている。この二基の塔と正面入口部分は、ロマネスク様式の作りで、その後の聖堂の大改築にもかかわらず、往時の姿のままにとどめられ、今日に至っているわけだ。

一部をのぞきゴシックの大伽藍のなかに埋没してしまった建物の構造に関しては、第二次大戦後の修復作業の過程で、ほぼ全容が明らかとなっている。それによると本陣は両側に側廊を持ち、さらに袖廊が十字形に配されるバジリカ様式。奥行きは現在の建物の四分の三を有し、二基の「ハイデントゥルム」で囲まれた部分が横巾にあたる。地下の遺構調査からこれまで異論のあった袖廊の存在が確認されたばかりか、本陣と側廊はそれぞれに半円形の壁龕を備えていたことも判明したのだ。霸王が旧バーベンベルク家領に力を及ぼしはじめたのは、一三

世紀の中葉、したがって記録には残らないものの、一三世紀を通して宮々と進められていた大聖堂建立の工事には、ボヘミヤ王の手厚い援助があったとする方が自然だろう。

※ ※ ※

西暦一二七六年、ルドルフの登極から三年目の夏、ついにオトカル討伐軍が動きだした。本隊はレーゲンスブルクから、ドナウ川沿いにオーストリア公領へ、チロル伯・マインハルトの軍勢はケルンテン、シュタイエルマルクを席巻。このチロル伯、娘を国王の長子アルブレヒトに嫁がせ、いまやルドルフの片腕として重きを為している武将である。帝国軍に呼応する土着貴族はあっても、齒向う者は無く、ただオトカルの駐屯軍が置かれていた親ボヘミヤ派の諸市、グラーツ、クロスター・ノイブルク、ヴィーナー・ノイシュタット、それにヴィーン

はかなりの抵抗を示す。オトカルが前線基地として重視していたクロスター・ノイブルクの町は、バイエルン勢の機略であっけなく陥落。敵に追撃されている振りをしてながら開門を求めるバイエルン兵にハメられ、警備兵は敵方を城内に引き入れてしまったのである。ヴィーンは五週間ものあいだ降服しない。ルドルフは町への直接攻撃を控え、まずはこれ見よがしとばかり、町の周囲に広がるブドウ山を荒し、包囲による兵糧攻めと一種の経済封鎖とで、町の泣きどころを突く美事な戦法をとった。市政の責任者らも降服を良しとする町民の声に抗しかね、ついに市門を開けはなつ。

旧バーベンベルク家領が、一斉にルドルフ陣営になびき、盟友と頼むバイエルン公は国王の娘婿におさまり、エンス川以西の領有をチラつかされたらしく、帝国軍のお先棒をかつぐ有様、そのうえ都市も次々に陥落という情勢に、さしもの霸王も和睦にしくはなしと踏む。干戈を交えたうえの屈服ではなかったから、質素な装いのル

ドルフを尻目に、霸王は眩いばかりの装束で、談合の場に現われる。だがかれの劣勢は如何んともしがたく、オーストリア、シュタイエルマルク、クラインは没収、ボヘミア、メーレンすら改めて拝領させられる憂目をみたのだった。

ルドルフは霸王の面子をおもんばかり、ヴィーンの近く、ドナウ中洲での封建の式は、人目に触れぬよう幔幕をめぐらせたなかで取りおこなったとされる。グリルパルツァーもこの巷説にもとずいて作品を構成し、しかも霸王が封邑拝領の姿勢をとった瞬間、遺恨をいだく者の手で幔幕の綱が絶ちきられ、その屈従の姿が露になるといった見せ場を持ちこんでいるが、これも史実ではないと見る向きが多いようだ。ルドルフがこの時点で、敵將の反撃を予測していたかはあやしい。相手を徹底的に叩きもしなかったし、談合では大いに譲り、ドナウ左岸の地をクレムス附近を除き、ボヘミア王子ヴァーツラフ（在位一二七八——一三〇五）に嫁す娘の持参金として

いるほどである。

ルドルフはこのヴィーンの和約で、家領拡大の宝刀、ハプスブルク一門のお家芸となる婚姻政策を披瀝し、娘をプシエミスル家に、嫁がせただけでなく、次子に霸王の娘をもらい受けるといった二重の結婚契約を成立させている。確かに始祖ルドルフのやり方は、後代に貴重な手本を提供するものではあったが、かれがこの時早くも、王朝版図の確固とした見取図を描きながら、事を遂行したなど見るのは深読みというものだろう。

そもそも王家間の縁組は、不確定な未来の一時点に賭けられた壮大な勝負、いつ丁とでるか半とでるか分らぬ遠大な賭の相貌を帯びている。ヨーロッパにあっては長い間、王室の結婚政策は文字どおり、一国の命運を左右する重大な影響を及ぼしてきた。姻戚関係を結ぶということは、娘の嫁ぎ先とか、嫁の実家とかに対する双方の気くばりによる両国関係の円滑化云々などといった、いわゆる「親善外交」の枠におさまる事項では決していない。

これは文字どおり命を張りあったの大勝負で、相手の王家断絶をもってようやく勝敗が決するという非情なものである。少々意地悪く云えば、合法的「お家乗っ取り」、遺産相続権の発動である。だが遺産とはいっても少々の家屋敷ではなく、臣民つきの広大な国土といった途轍もない代物。結婚契約書にはむろん、いやしばしば和平条約にさえ、継承・相続問題が明文化されたが、国民の意志などという発想はなきに等しいのだから、一国の継承権も断絶した王家との血の繋りが基準となる。領土侵略や内政干渉も血脈をたどっての主張が大義を与え、民族主義の立場からすれば許しがたき篡奪行為ですら、当事者にあつては権利侵害に対する正当防衛。剣や槍、鉄砲や大砲で事の決着がつけられようとも、そこには血脈にもとづく権利行使といった大義がかかげられなければならなかった。したがって戦争の勃発をみるや、王家の文書室は、喧嘩相手との血のつながりを探し求める作業でおおわらわとなる。

しかしながら、この血統権原理による継承権、困ったことに相手側にも多かれ少なかれ同等の権利を発生させ、しかも世代交替によって、その順位がじきに入れかわってしまうのである。こうした権利の消失・縮小に對処し、有利な順位を保持するためには、契約更新の手を次々と打ちつづけなければいけない。遺伝学の知識は無くとも、悪しき事例からわかっていた、弊害強き近親結婚に王家が走ってしまうのも、こうした事情によるところが多い。手取りばやく目的を達しようと、跡取り娘を妻にしたところで、義父が何時なんどき若い妃を求め、世継ぎを得るかわかったものではないし、戦いに明けくれば、疫病の蔓延に苦しんでいた時代のこととて、我が身の方が先に駄目になるやも知れぬ。こうしてみると王族間の縁組は、相手側の消滅に狙いをつけた毒矢と云うのも酷すぎる。細かな差引き勘定をしてみたところで、双方大して変わらぬ危険を背負っていたからである。まずは両家の行末長き繁栄を寿ぐ慶事には、違いなかったと

いうところに落ちつこうか。確かにスペイン獲得に結実したハプスブルク家の婚姻政策は、遠大な構想に奇しき僥倖が作用した結果だったし、マリア・テレジアの登極をめぐる王朝の危機は、これが裏目にでた典型的な事例だった。

その昔列国のいくつかが、マリア・テレジアの家督相続に異議を唱え、武力行使に踏みきったのも無理はない。彼女の相続は、いわば国際条約の一方的な破棄、友好諸国の権益に対する重大な侵犯だった。王朝の継承権問題は、国内法の手直し程度で済むものではなく、当時のヨーロッパではまさしく超一級の国際法規、諸外国の意向をうかがい、承認のため全力投球しなければ事は運ばなかったのである。

女帝の父カール六世は、レオポルト一世の次男で、スペイン・ハプスブルク家の断絶をうけて、ヴィーンからはるばるイベリア半島に送りこまれた挙句、スペイン継承戦役でフランスに苦杯を嘗させられた経歴の持ち主。

兄ヨーゼフ一世が三三歳の若さで、天然痘に倒れたとき、かれはふたたびヴィーン宮殿に呼びもどされ、一門の総帥の座についたのである。若くして相続権をめぐる列国の掛け引きに巻きこまれたカール六世帝は、世嗣ぎ無き王家の悲劇がどんなものか、身に染みて分かっていた。スペインでの苦い経験とハプスブルクの家盛運に乗じ、カール帝は同家懸案の相続順位法制定に手をつける。時あたかも王朝始まって以来の大版図を誇る時代ではあったが、事がことだけに国事勅書の公布は恐る恐るなされる。案の定、列国の態度は冷やかなことこのうえもない。それもそのはず、継承権はまずかれの男系の子孫に、次にかれの女系の子孫に、それから亡き兄の娘たちといった順番で、領土永久不分割と長子相続制とが盛りこまれていたのだった。実は半島におもむくカールのため、父レオポルト帝はスペインに対する自分とヨーゼフの権利を放棄した際、オーストリア、スペイン両家に男系が絶えた場合、女系にも継承権を与えるとの家内法

を定めていた。むろん、この時点では兄の一門が優先され、弟の方は二の次にすぎない。したがってカール帝に男子がなかった場合には、兄が残した娘に相続権が渡ってしまう事態が発生する。

因果はどう巡りめぐったのか、今度はオーストリア・ハプスブルク家の上に暗雲がたれこめ、是が非でも自分の子供に家領を譲りたいとする帝の願いもむなし、王妃は一〇年余り懐妊の兆しを見せてくれない。それでもついに男児出産に漕ぎつけたものの、わずか六ヶ月で死亡、しかしこのあと通じが良くなったものか、彼女はつげぎまに娘ふたりを生み落す。ふたりの子供が美事に楽器やダンスをこなし、スカートの裾をヒラヒラさせながら、娘らしくなっていくにつれ、皇帝夫妻から男児誕生の可能性はますます遠のき、帝の生来の粘液質も一段と昂じてゆく。列国が眉をつりあげたのは、もちろん、女系相続に関してである。公領内の承認を得るのは、比較的簡単だったが、家領には王国も含まれ、はたしてズ

ボンのはけぬ当主を推戴する気になってくれるか、心もとない。見返りを求めてくる等族会議の対応に追われようとも、まだまだここまではヴィーン宮殿の睨もきく範圍。だが列国との交渉はそうはゆかない。事の深刻さを充分認識していたカール帝は、なんとか批准に漕ぎつきたいと焦り、列国の無理難題にも敢えて逆らおうとはしない。フランスの顔色をうかがい、スペイン王冠を諦め、愛娘の婿に列強の王子は罷りならぬという一札すら甘受する。英国、オランダの興心を買おうと、順調の運びでいた東インド会社の経営を放棄。対トルコ戦役の勇将プリンツ・オイゲン公は、帝の弱腰外交に鍵は軍事力にありと進言したが、藁にもすがりたい気持の帝には通じなかったようで、カール六世は列国の好意に一縷の望みを託しつつ、享年五五歳で王家の行末を案じながら、憂悶のうちに崩御する。オイゲン公の言葉どおり、ヨーゼフの次女を娶り、ハプスブルク家の男系消滅に狙いを付けていたバイエルン公は、最後まで引きさがらず、フ

リードリヒ大王と合呼号して、カール六世の遺領内に侵入。このとき若い女相続人が超人的なエネルギーを発揮し、ついに劣勢を挽回したのは周知の事実であろう。

※ ※ ※

王者の面目を失墜し、故国に引き上げたボヘミア王オトカル二世は、ヴィーンの和約から二年もたたない一七七八年の夏、ルドルフに雪辱戦を挑む。このたびはバイエルン、ザクセン、ポーランドを味方につけ、メーレンから下オーストリアの国境に大軍を集結。一方ドイツ国王の陣営には、ルドルフの出身地スイスト、オーストリア・シュタイエルマルク・ケルンテン・ザルツブルクなどまさしく現在のオーストリア諸州から馳せ参じた騎士が集まり、さらにハンガリー王の強力な援軍も加わる。決戦場はチェコスロヴァキアとの国境地帯・ドナウ支流マルヒ川一帯だった。

「葉月二六日、聖バルトロメオの日を過ぎし土曜、両軍はマルヒの合戦場、地の者らがユードウンクスプオイゲンと呼ぶ平野に集結したり。双方の軍勢配陣を終えし頃、ローマ王は、その日そこにおりしクマーネン族、キリスト教徒らに、戦いの雄たけびとしてキリストの御名を与え、突撃にありしも、はたまた退却せしときも、△キリスト、キリスト▽なる言葉をば叫ぶよう命じ給いぬ。かくてこのときまで、異教の者クマーネン、半キリスト教徒なるハンガリーびとによりて蔑まれ、侮られし栄光のキリストなる御名は、クマーネン族、キリスト教徒らの別なく、ローマ王が軍勢の雄たけびとなり、△キリスト、キリスト▽なる力強き叫び声は、無数の木霊となりて響きわたることとはなりぬ。かたやボヘミヤ王は、配下の者らに△プラーク、プラーク▽なる合言葉を命じ、全將兵の首に白布をば付けさせしが、そは胸元と背を流れ、腰のあたりまで達しぬ。かくして合戦の火蓋はきられたり。戦いも初めのころ、ローマ王は突撃のさなか、いずれの者にか馬を倒され、地面に投げだされしが、ガバと跳ねおき、従士らに助けられ馬上のひととなるや、ふたたび逆まく戦陣のうちを飛び込みぬ。見よ、奇蹟の生じたるが如く、ボヘミヤの軍勢は散りぢりに打ち破られ、おのが王ひとりを残して敗走したり。敵軍はこれを追撃し、難なく殺したり。川を越えて逃れんとせし者、その昔エジプトびとが紅の海に飲みこま

れた如く、石とはなりて水底に沈みぬ。泡だち流るる水波は、深紅に染まり、屠られ、傷を負い、溺れ死んだ者らの血、水面に漂う。ボヘミヤ王と家来の戦車、さらに天幕にありし財宝略奪の餌食とはなりぬ。おびただしき者らクマーネン族に捕われ、哀れにも鎖につながれ、虐待されつつ引きずられたりき。大軍をば率いてボヘミヤ王に加勢せんとせし者らも、ボヘミヤ兵の敗走を目のあたりにし、はたまた馳せ参ずる途上にて、その報に接し、追撃さるるはかなわじとばかり、背中を見せて逃げだしぬ。なんたる悲惨な光景ぞ。野には無数の屍かさなり、おびただしき軍馬の死体はおのが血潮にまろび、つわものどもの臓腑は犬や鳥に食い荒されるがまま、これを埋葬する者の影もなし。盛名高かりしボヘミヤ王も、敵にとりまかれ、引きずりまわされ、槍を受け落馬したりき。疲労困憊せし王は献酌の司ベルトルト・フォン・エメルベルクら多数の貴族によりて、地面に突き倒され、喉当てに槍を突きこまれ、おびただしき突傷を受けしのち、剣でとどめの一撃をくらいて、息絶えたり」

これは『ヴィーン通史』と呼ばれ、ハプスブルク家の創業期の資料として評価も高い古文書の一節である。オーストリアの僧院年代記は、それぞれに宗教色を流しこみながら、両雄の激突とルドルフの勝利を記録する。バ

ーベンベルク家の断絶と大空位、そして新王朝誕生という時代の大きな変転に直面し、しかも遠国出身の国王だと考えていたそのひとが、精力的に東国の自分たちに関わり始めたのだから、地元の僧らが年代記作成に色めきたったのも無理からぬところ、周囲に生起する事象は一地方、一僧院の縁起由来にとどまらず、帝国史そのものと重なるというわけだ。

こうした史料を突きあわせても、両軍の兵力の規模はなかなか掴めない。ある試算によれば双方三万程度の陣容、死傷者の数は一万四千とはじき出されている。早朝に始まった戦いは、正午になっても決着がつかず、真夏の強い陽差しと激しい衝突に、鉄の衣をまとった騎士たちの身体は煮えたぎる。集団試合とはいえ、一騎打ちの要素が濃かった当時のこと、総大将ルドルフを倒さんと付けねらう武将も多く、さるポーランドの騎士は巨体にもものいわせ、槍をかまえて突進したが、すばやく身をかわしたルドルフに、逆に突き落されたとの話も残る。

敵味方いり乱れての激戦だったが、勝敗のわかれ目はひよんなことからついてしまったらしい。帝国旗を奉持していたホーホベルク辺境伯が、突如、旗を大きく振りまわしながら、大音声で「敵は逃げだしたぞ」と叫んだのに続き、輩下の将兵らも一斉にこれに呼応したのだ。味方の一角が崩れたと思いきや、ボヘミア勢は浮き足だち、ついに算を乱して敗走を開始し、「戦え、もどせ」と怒号する総大将の声も耳にはいらぬ。大軍を寄せ集めてみたものの、ボヘミア陣営には当初から、足並みの乱れがあったらしく、王国の重鎮・ローゼンベルクの後衛軍も打って出ようとしぬ。霸王オタカルは、朝日をうけて銀色に輝いていた装束もむしりとられ、満身創痍の無残な姿で倒れ伏していたという。霸王はルドルフの手勢に追いつめられたのではなく、配下のシュタイエルマルク郷士の裏切りにあったとされるようだ。

マルヒフェルトで敵軍を敗走させたあと、ルドルフは霸王の遺骸をともない、ヴィーンの町に凱戦してくる。

このとき町は聖職者や有力者を先頭に、大挙して王を出迎えたという。その名も霸王と同じオトカル・フォン・シュタイエルマルクは、『韻文シュタイル地方年代記』で、この情景を歌いあげている。一三二〇年頃に完成されたと見られるこの大作は、記録や伝承によりかかりながら詩的扮飾を施したもので、かならずしも史実に忠実だとは云い難いが、バーベンベルク時代の歴史を、やはり韻文形式で書き記したかのヤン・エニケルの作品と双璧をなすものではある。

そのとき

あまたの鐘打ち鳴らされ

喜びにわく者の姿あふれたり

さもありなん

大いなる勝ち戦のあと

殿様が御帰還あそばれし由なるに。

かく迎えられしのうち

ルドルフ国王

あまたの者に付き従われ

聖シュテファンに捧げられし
大聖堂にと向いたりき。

ルドルフはこのとき、敵将の遺骸を丁重に弔ったと称えられるが、霸王の柩は明らかに、「さらし台」の役割をも担わされていたのだった。生前多数の荒武者の一同を率いて、大聖堂や王宮の造営現場に雄姿を見せ、氣前よく町に恩顧を振りまいてきた男の屍を展覧に供し、新旧交替の現実を、しかとヴァイン市民の胆に命じさせたのである。町にはオトカルに心を寄せる者が多く、とりわけ市政を牛耳っていた上流市民はそうだった。先の戦で国王に市門を開けようとしなかった町の最高責任者パルトラム一味は、ヴァインの和約後もボヘミヤ王と内通し、反乱を企てたが発覚、バイエルンへ逃げるといふ騒動すら持ちあがっていた。ルドルフは町を手なずける為、フリードリヒ大帝の例にならない、ヴァインにふたたび帝国都市としての身分を与えることとなる。

ボヘミヤでは、勝利の余勢をかってメーレンからプラ

ハへと迫ったルドルフを、国王に推戴しようとの動きも現われたが、かれはこれを受けず、娘婿で霸王の遺児ヴァーツラフを王位にすえた。プシエミスル家断絶ということだったら、話にのつたろうと思われるが、霸王には歴とした王子がいたのである。それにルドルフの前には、オーストリア、シュタイエルマルクなどオトカルの遺領が広がっている。まずはこの地に足場を固める必要があった。



マルヒが原の決戦から三年目の一二八一年一二月、国王ルドルフ一世は、帝国都市アウグスブルクに諸侯を集め、ふたりの息子にオーストリア、シュタイエルマルクを封土した。クラインとヴィンディッシュマルクは、ハプスブルク家領とされながらも、とりあえず功臣ティロル伯のもとに留め置かれる。これをもってハプスブルク

家は、帝国東方の地に新領土を獲得したのである。

一門の発祥の地・スイスの家領は、この後三代にわたって、誓約同盟に食い尽くされ、やがて白銀の山々と青い湖の西方の地は、かすかな残像、遠い昔の祖先たちの勲を偲ぶ伝承の地と化してしまう。

新しい領国にあつては当然のことながら、ハプスブルク家の者達はまったくの新参者、土着勢力にとって一族は帝国から天下った余所者だった。それでも国王ルドルフとかれらの間には、対オトカル戦を通しての結びつき



ドイツ国王アルブレヒト一世

があり、国王の方もあえて、相手の特権に触れようとはしなかった。ところが、両公領の宗主におさまった長子アルブレヒトは、もはや土着勢力の不平不満など斟酌しない。アルブレヒト公は、父王の持っていた豁达さにまいったく欠け、あくまでも筋を通さねば済まぬ冷厳・冷徹の人だったらしい。強力な領邦支配をめざす新しい宗主に対し、公領の豪族や都市はバイエルン、ボヘミア、ハンガリーと結び反乱を繰りかえす。新王朝の成立に功もあり、それ相応の扱いを期待していた土着勢力と、公が引き連れてきた「シュヴァーベン」の従臣たちとの反目は大きかった。反逆者一味の、こうした連中を即刻追放しなければ決起するとの最後通牒にすら、アルブレヒトは語気も鋭く、「余はシュヴァーベンの犬一匹たりとも手離そうとは思わぬわ」と云い放つほどだった。

一二八八年の反乱はヴィーンの町をも巻きこんだ。アルブレヒト公は、バーベンベルク家の栄光公以来町に下賜されていた商品集散権、つまり一種の独占販売権を無

視し、身内の「シュヴァーベン商人」保護に乗りだす。

この特権、他郷の者の商業活動を大中に制限し、ヴィーン商人に莫大な利益をもたらしてきただけに、町の怒りは押えようもない。新たに流れ込んできた余所者が、公の権威をかさに利権漁りに狂奔し、好餌とみればなんにでも喰らいつく。市民はかれらを「野良犬」と唾棄するほどだった。市中に立ちこめる険悪な空気に、アルブレヒトはカーレンベルク山頂の城に移り、ここから水路・陸路を押えて、眼下の町を牽制し、その首をジワジワと締めあげてゆく。ついに音をあげた町は、裸足姿の代表団をカーレンベルクの山上に送り、恭順の意を表わしたが、恐懼する町の長老らを前に、公は父親の発した帝国都市認可状を破り棄てたという。アルブレヒト一世の治世の前半は、土着勢力との軋轢でずいぶんと揺れ動いたが、やがてドイツ国王の座に狙いを定めた公は、領国の安定化をはかる必要に迫られ、協調路線を打ちだしてくる。ヴィーンにも新たな都市法が与えられ、従来の諸特

権がよみがえる。市政は市長以下参事会によって運営されたものの完全な自治を手にすることはできず、あくまでハプスブルク家の城下町としての責任をはたすよう求められる。したがって町は、他の中世都市のように、巨大な政治力を持つに至らなかったが、その反面、王家の隆盛とともに声望を高め、そのふんだんの恩恵に浴することとなった。

地の者たちがハプスブルク家を他所者と見なくなり、また一族のなかにも土着意識が芽ばえてくる日は、まだまだ先のことである。狭い家領の経営だけに恵まれず、三代で土着化はなつたろうが、なにぶんヨーロッパ全域を窺おうとする覇気に富んだ一門だけに、ある日突然、遙か遠国の、言葉も風習も異なるハプスブルク領で育った大公が、宗主として東国の家領に天下り、地元勢力を苛立せ、ヴィーン宮殿すら、その異和感にとまどうという歴史が、幾度か繰りかえされていったのだった。

※ ※ ※

ルドルフ・フォン・ハプスブルクは、ついにローマでの戴冠の機会に恵まれなかった。残念なことに皇帝なる称号にあと一步という、ローマ王の身分で終わったのである。いやいや、半島への深入りを避けようと、ローマ詣をわざと引きのばした形跡すらある。聖庁はルドルフの国王就任を歓迎し、教皇は相好をくずして国王を差し招いたが、この裏にはルドルフが、シュタウフェン朝のイタリア政策の放棄を、約束した事実があったと見られている。

ドイツとイタリアの中間地帯で成長したルドルフは、ただやみくもに南へ南へと血をたぎらせたゲルマン系諸王とは違い、冷静に半島の内情を見極め、聖ペテロの座を抱えこんだ地の恐しさを十分に認識していたと考えられるのだ。それに加えて、卑賤とは云わないまでも、これまで帝冠とは縁のなかった一門の出という事情が、これに現実路線をとる余裕を与えたともされようか。「七つの岡」の都へ華々しく入城した先祖の栄光を追い求め

る必要もなく、況や、シュタウフェンの王族たちのような継承権など、いくら系図をめぐったところで持ちだせもしない。半島と血縁上のしがらみがまったく無かったという点で、理念上の帝国と現実のそれとを、区別できるゆとりが生れたわけだ。新興一門のなによりの強みだろう。

大空位時代の残務整理に忙殺され、機会を失したのだと解釈する向きもあるが、かなりの者はそうは見えていない。たとえばダンテは『神曲』で、教皇のため駆けつけることもできたのにドイツだけにかまけ、「帝国の庭」を荒れるがまま放置したと断罪し、また『オーストリア英雄伝』のホルマイル男爵は、聖庁参り回避の姿勢を、ルドルフの聡明さのひとつに数えあげるといった具合である。

教皇猥下による塗油を受けたくはないかとの問いかけに、国王はホラチウスの詩句をもって、教皇庁を獅子の穴に譬え、「ここに足を踏み入れし者にていできたる者あらず」と答えたとの巷説も伝わる。ホルマイル男爵

も、この逸話を念頭においているらしいが、どうもこれは眉つばもので、ルドルフには古典をすらすらと引用できる程の学識はなく、それこそ第一級の文化人だった先帝フリードリヒ二世と較べたひには、その足元にも及ばぬ貧弱なものだったと考えられる。

別段教皇の手による加冠や塗油の式を受けなかったところで、ドイツ国王にしてローマ王。皇帝たる正式の称号は無くとも、帝国最高の権力者なることに変わりない。だがここに、深刻なひとつの問題が浮上してくる。ルドルフがローマ王の身分にとどまる限りは、息子に帝国後継者としての地位を確保してやる便法がとれないのである。後年ハプスブルク家の者たちは、ドイツ国王に選出された時点で、神聖ローマ皇帝を称するようになるが、この時分にはまだ、アーヘンの町に出かけただけでは、ローマ王と称される身分、皇帝の玉座はさらに一段上に置かれていた。したがってかれが帝位に登れば、ローマ王、つまりドイツ国王位は空席となり、実際には皇帝と国王の守備範囲にさしたる違いはないとはいえ、理

論上は別のひとりだが、ドイツ管区の責任者に指名されることになるわけだ。この論法によって、たとえば赤髭帝は長子のハインリヒ六世を、フリードリヒ大帝は初め長男、次に二男をドイツ国王に選出させ、皇位継承者としての資格を与えてしまう。現役の皇帝がその威光をふるに活用して、息子たちの選挙戦をやるのだから、まず余程のことがない限り落選などしない。ハプスブルク家のフリードリヒ三世帝も、皇子マクシミリアンの為、同様の手を使い、みごと帝位世襲化の道をひらくが、まだまだ始祖ルドルフは、この伝家の宝刀を抜けず仕舞に終わったのである。

ルドルフが一二九一年七月一日、国王の座にあること一八年、享年七三歳の高齢で身罷ったとき、ハプスブルク家の勢力拡大を嫌う選帝侯たちは、ナッサウ辺境伯アドルフを王位に据えた。この伯、さして悪い人物ではなかったが、なにぶん取るに足る所領もなく、家臣のユダヤ人にも金の無心を断わられ、選挙費用も叔父のマインツ大司教に払ってもらう程の小侯だった。アルブレヒ

ト公は選帝侯らのきたないやり口に怒りを押えきれなかったものの、とりあえず父王の手元にあった神器を返上し、王位奪回の機を窺う。その時はやがてきた。アドルフは不法にも、チューリンゲン伯領に手を出し、ドイツ諸侯から見限られたのである。魔王と新しく国王に選出されたアルブレヒト一世とは、事の決着をやはり合戦でつけなければならなかった。魔王は勇ましく戦ったが、天はかれに与みせず、槍を顔面に受けて落命した。

ハプスブルク王朝のいしずえが固まろうとする頃、一門に決戦を挑んだ者らは、オトカル二世、アドルフ・フォン・ナッサウなどを筆頭に壮絶な最期をとげている。無残とはいえ華々しく戦っての、武士の本懐をつくした死にざまだったが、国王アルブレヒトを見舞った運命は、相続争いから甥に殺害されるという陰惨なものになってしまふ。始祖ルドルフの場合には、老いの身に忍びよる死の気配を感じとったとき、歴代の国王の墓所・シユパイエルにむかい、喜々として行幸の道をたどるほどの大往生だったと称賛されている。在位一〇年、まだ四

三歳の若さでアルブレヒトは非命に倒れたが、それも肉身の手にかかるという、他の王家はいざ知らず、オーストリア・ハプスブルク家の長大な歴史における、唯一の「近親殺害」の犠牲者だった。隣国ハンガリーのアルパード家やボヘミヤのプシエミスル家の王たちの周囲には、惨殺された親族の血の匂と、眼をくりぬかれた一門の者らの呻き声が充満しているのに反し、オーストリア・ハプスブルク家には、この叔父殺しの惨劇以外に、肉身殺しの例はない。

もちろん、家督相続をめぐる兄弟の反目はあったし、それが一触即発の危機的状況に立ちいたったことも一度や二度ではない。しかし一門の者たちは、肉身が互に殺しあう修羅場だけは、なんとしてでも回避したいとする美事な抑制力を示すのだ。カール五世と弟公フェルディナントの対決は、ハプスブルク家のオーストリアとスペイン二分割案となって妥協点を見いだしたし、宗教戦争の嵐が吹きまくるなか、皇帝ルドルフ二世に対し弟公マティアスが企てたクーデターにあってすら、兄弟の間に

は一滴の血も流れない。一六〇八年、マティアスはヴィーンから兵を率いてプラハに現われ、城の奥深く引籠ったまま、わずかの近従以外受けつけようとせず、練金術と美術品の蒐集に耽溺するルドルフ帝に、政権移譲を迫る。兄の勘気にふれ、これまで妃もなく忍従の日々を送ってきたマティアスではあったが、兄に帝冠をかぶったまま隠棲してもらおうという処置以上にでようとしないのだ。

こうした伝統を形づくってきたのはもちろん、選ばれし一門という異常なまでに強烈な誇りであり、これが常に一族の者たちに、他とは懸絶した血の結びつきを意識させ、近親憎悪のはむらにことごとくが燃えつきようとする瞬間にあってすら、なおも互の血の確認を求めあい、最後の一线を越えさせない力となる。このときかれらの前には、国王アルブレヒトの死と、それに続いて起こったすさまじいばかりの復讐劇が、痛恨と戦慄の禁忌として、立ちはだかつてもいたのだった。

この事件、ルドルフの二子に元バーベンベルク領が封

土されたのち、ふたりの宗主に異議を申し立てる二公領の貴族らの意向を受け、弟ルドルフ公には相応の補償をするということで、改めて長子アルブレヒト公が、全家領を譲り受けたことに端を発する。弟公とボヘミヤ王女との間に生まれたヨハンが、父親の死後、スイス地方の家領分割を願いでる。しかし一門の総帥アルブレヒト一世は頭をたてに振らない。後見をようやく脱しようという甥御の年の若さと、その無謀な性格を危惧したのだとされている。これを恨んだヨハン公と近従らは、ハプスブルク家発祥の地・アールガウで国王を襲う。わずかの従者を連れただけの王の小舟は、ロイス川の対岸で反逆者らの待ち伏せにあったのだ、いやそうではない、たまたま国王とヨハン一味が、同じ舟でロイス川を渡るという不幸な巡り合わせが、凶行を呼んでしまったのだとか、史書はそれぞれにこの国王暗殺事件をセンセイショナルに報じている。みずから凶刃を振ってしまった若者と一味の者らは逐電したが、復讐の鬼と化した宗家一門の追跡に、次ぎ次ぎと捜しだされ、一族もろとも極刑に処さ

れた。ただヨハンだけは叔父殺しの罪の重さに、頭をまめるめ流浪の旅をつづけるうち、ついにイタリアはピサの町で捕われたとも、惨劇の地に建立されたケーニヒスフェルト修道院で、悔恨のうちに果てたともされている。以後、ヨハンは「親族殺し」の諡号をもって呼ばれ、ハプスブルク家の系図の一隅を汚すこととなる。一門の者たちは燦然たる自家の系図にこびりつく、この呪われた一点の染みに眉をひそめ、一族結束の自戒をあらたにしてゆく。アルブレヒト王の没後、ハプスブルク家は一三〇年の長きにわたって、ドイツ国王の座から遠ざかり、帝国の指導権は次第にルクセンブルク家へと、移ってゆくこととなった。（一九八五年四月 はば たけし）

- Czeike, Felix : Das große Groner Wien Lexikon, Verlag Fritz Molden, Wien-München-Zürich, 1974
 : Geschichte der Stadt Wien, Verlag Fritz Molden, Wien-München-Zürich, 1981
- Frass, Otto : Quellenbuch zur Österreichischen Geschichte, Birken Verlag, Wien, 1956
- Hantsh, Hugo : Die Geschichte Österreichs, Verlag Styria, Graz-Wien-Köln, 1969
- Hornmayr, Joseph : Österreichischer Plutarch, Verlag Anton Doll, Wien, 1807
- Kleindel, Walter : Österreich—ein Herzogtum, Österreichischer Bundesverlag, Wien, 1981
 : Urkund dessen, Österreichischer Bundesverlag, Wien, 1984
 : Österreich, Daten zur Geschichte und Kultur, Ueberreuter, Wien-Heidelberg, 1978
- Loidl, Franz : Geschichte des Erzbistums Wien, Herold Verlag, Wien-München, 1983
- Mackensen, Lutz : Staufezeit, Peter Lang, Frankfurt am Main, 1979
- Perfahl, Jost : Wienchronik, Verlag Das Bergland-Buch, Salzburg-Stuttgart, 1961
- Pollak, Walter : Tausend Jahre Österreich, Jugend und Volk, München, 1975
- Rudolf von Habsburg-Lothringen : Die österreichisch-ungarische Monarchie in Wort und Bild, Verlag der
 kaiserlich-königlichen Hof und Staatsdruckerei, Wien, 1890
- Tietze, Hans : Geschichte und Beschreibung des St. Stephansdomes in Wien, Verlag Rudolf M. Rohrer, Baden bei
 Wien, 1931
- Wandruszka, Adam : Das Haus Habsburg, Herder Verlag, Köln, 1968
- Zöllner, Erich : Die Quellen der Geschichte Österreichs, Österreichischer Bundesverlag, Wien, 1982